

ト 飛行機に乗った  
ドンキホーテ 第36回  
私のスペイン定年留学⑩

“ギター留学”の  
練習を披露



来訪メンバーは、くだんのリスベス、彼女と一緒に部屋にいるテレシータ、ドイツのマイテ、スウェーデンのカタリーナ、マリーナ、メキシコのリスティ、イタリアのアレクサンドロ、それに日本のY子。さらに、夏季コースで一緒だったスイス人のサラが、恋人と一緒に我が家の下に住んでいたのので声をかけたのですが、この日は友人の結婚式に招待されているということで、残念ながら出席できませんでした。自分たちを合わせて合計10人ともなると、比較的広いリビングも狭くなります。急きよ、ベランダへテーブルを移し、ありあわせの椅子を全部出しました。飲み物のうちビールは、国産のスペインのほか、参加者の国籍も考えドイツ、アメリカのものを用意しました。「サルー！」

歓迎の乾杯をし、食事が始まると、テーブル上の料理はかなりの速いペースで減っていきます。ほとんどが一人住まいの独身生活。それに体も大きく若さにあふれています。少し多目かなと思って作った皿も、どれも瞬く間にきれいに片付いていきました。アルコールが少々入ってくると、談笑も一段と賑やかに。話題はスペイン生活で苦労していること、母国での生活模様、つい先ごろの試験の結果等々。やがて担任の先生の名前をあげ、教え方の特徴から、教材、教授法まで感想や批評を始めました。どの国にあっても、学校外で生徒の教師批判は同じなんですね。そのうちに、隣の家のベランダでもフィエスタが始まりました。スペイン北部のバスク地方から来た一家です。親戚か友人かわかりませんが、5人ほどがテーブルを囲みCDで音楽を流し、食べながら談論風発しています。

くっきりと抜けた青空のもと、はるか1キロほど先には濃紺の地中海が見えます。アンダルシアの太陽は、10月でも日差しは強いが、ベランダを吹きぬけていく風はもう完全に秋。ひんやりとさわやかで心地よい。その場の雰囲気に乗って私はギターを持ち出しました。クラス仲間の興になればと、思い切って弾いてみることにしたのです。

実はこのギターも、先生について9月から練習を始めただけでした。我が家のすぐ近くにギターの工房があります。スペインといえばフラメンコとギター。「ならば本場にながら、腕を磨かない理由はないだろう」。そんな思いが高まって、こちらにも挑戦することになったのでした。“ギター留学”です。幸いに、製作ギターの小売もしてくれるということで“スペイン製ギター”を買ひ、ついでに個人教授を紹介してもらいました。その先生に、週1回教えを乞いながら練習してきた「ロマンセ・アノニモ(禁じられた遊び)」の前半部分と(後半部分は初心者には難しい)、ギターの入門曲「グリーンスリーブズ」(電話で相手が出るのを待っている間によく流される曲)を弾いたのです。途中で2回ほどつかえましたが、なんとか弾き終えると、全員が拍手を。「ブラボー！」なんて声もかかりました。もちろん、彼等の年配者への最大限の“激励”であろうことは私もわかっていました。花束こそ無くても、拍手があっただけで、演奏者としては嬉しいものです。人間は、注目される“晴れ舞台”があることも大切なのです。

かくして、我が家での初の会食会は終わりました。玄関を出て行く彼等を、再びキスと握手で見送りながら、私の心の中には、ふと全員の親代わりのような感情さえもこみ上げてきたのです。「またいつか、機会を見て呼んであげることになるかもしれないなあ…」